

通訳における訳語選択の理論と実際

鶴田知佳子（東京外国語大学）

佐藤芳明（慶応大学 SFC 研究所）

河原清志（立教大学異文化コミュニケーション研究科）

How does the professional interpreter go about choosing the “best” translation equivalent in the target language? This article, focusing on the interpretation of English into Japanese, approaches this fundamental question from both theoretical and practical points of view. We attempt to show an underlying mechanism behind the process of selecting translation equivalents (i.e. Japanese expressions) within the theoretical framework of cognitive semantics. Contrary to a widely-held belief, frequently occurring basic words are more difficult than so-called “difficult (technical) words” since the choice of the translation equivalent for a basic word is based on the context in which it is used. Experienced interpreters tend to rely on their instinct in choosing the right translation equivalent, but it is our claim that their instinct should be supported on theoretical grounds. In this paper, we analyze texts drawn from actual interpretation scenes, and discuss the results from a theoretical perspective. We also suggest that the proposed framework has some pedagogical implications for both interpretation/ translation education and English education.

はじめに

通訳の現場で訳語の選択に苦慮する場面はかなりある。特に、基本語と呼ばれる多義性のある頻度の高い語は、意外と訳語選択に迷うことが多い。現場では直感的に訳語を選択しながらその場を切り抜けているが、そこには直感を支える理論的な基盤があるはずだ。そこで本稿は通訳における英語から日本語への訳語選択のメカニズムを多義的な基本語を中心に認知的スタンスから分析し、通訳・翻訳の実践や教育へ応用可能な形で実践報告をしつつ、理論的枠組みを提唱してゆく。

TSURUTA Chikako, SATO Yoshiaki, KAWAHARA Kiyoshi, “Lexical Selection in Interpreting -- A Theoretical Account.” *Interpretation Studies*, No. 4, December 2004, Pages 15-40

(c) 2004 by the Japan Association for Interpretation Studies

1. 分析対象—多義語の訳語選択

英語 (SL) から日本語 (TL) への通訳において、多義語の訳語選択がいかなる “disambiguation” のメカニズムを通じてなされるかという問題設定を行うとすると、おそらく、語彙、文法、慣用表現、言説の型、発話者の意図などの諸レベルを包括し得る重層的議論が求められる。これは長期的展望を要する課題であり、限られた紙面で一括してなし得ることではない。そこで本稿では、上記のうち語彙の領域に焦点を当てて議論を行うものとする。

語彙レベルの訳出について考える際には、英語 (SL) における語の意味と、日本語 (TL) における訳語の問題を立て分けて議論する必要がある。前者については語の意味の構造について理論的解明を目指す一方、後者については訳語の選択に関する実践的手法として整備していくという方向が望ましいであろう。両者の問題を混在させたままでは、訳語から一端切り離して論ずべき語自体の意味分析が軽視されてしまい、それゆえに、起点となる語 (SL) の意味把握の相と、訳語 (TL) 決定の相のいずれが問題となっているのかを明確にすることができず、結果として通訳の実践や教育への応用に資する議論を生み出すことを望めない。逆に、英語の語彙について品詞の別に応じた意味分析がなされ、さらに多義の構造が解き明かされていくとするならば、それらの作業に依拠した形で訳語決定の問題を、単なる経験則の集積とは異なった理論的背景を伴ったものとして体系化していくことも可能となるのではないか。

このような見地に立って、本稿では分析の便宜上、上記を分けて論ずることとし、おもにを理論的分析の対象に据えて、英語から日本語への通訳における語彙レベルの意味処理について議論を行う。その際、特に英語における語の意味を、多義の問題に焦点をあてて分析を行うものとする。ただし、語の意味を論じるという主旨に適う限りにおいて、成句単位への言及も一部許容するものとする。

また、本稿は認知的スタンスをベースに論を展開する。この立場は、(1) 心的意味表象、(2) 情報処理、を2つの柱とするが、このうち、本論の射程となる領域は主として多義語を巡る心的意味表象である。それがいかに目標言語の訳語決定に反映されるかについて論じるものである。

2. 多義研究の課題

まず、多義の定義について確認しておくとして、ある語が複数の意味的に関連し合う語義を有するときに、その語を「多義語」と呼ぶ(国広 1981, 1997; Ruhl 1981)。例えば、head には「頭」「頭脳」「最上部」「表題」「長」「頭数」「(コインなどの)表」などの語義がある。これらのうち「頭脳」は head の基本義とみなせる身体部位としての「頭」から、そこに内包される器官へと指示対象を横滑りさせたものであり、「頭数」はそれを「頭をもつ人(の数)」へと転じている。「最上部」とはいわばモノの頭に見える部分であり、「表題」は文章における頭に相当する部分と考えることができる。「(コイン

などの「表」は、他の語義と比較して関連性を見出しにくい、これも Heads or tails? (表か裏か) などの表現があることから、コインの表を身体的部位の「頭」に見たことによって成立する語義であることが分かり、意味の関連性が説明可能である。したがって、これらの複数の語義は多義現象として捉えることができる。これに対して、例えば名詞の kind と形容詞の kind などは、そこに意味の連続性を見出すことはできない。ゆえに、同一語の多義現象とはみなされず、それぞれが独立した語として把握される。

これらの例からも分かるように、多義研究における課題は以下の2点である。複数の語義を確定すること、複数の語義の間の意味的なつながりを説明すること。辞書的な記述を目指す場合にはの徹底も不可欠だが、ここでは英語の語彙項目が多義であるとした場合、その多義性がいかなる意味的動機づけによって生じているのかという視点から議論を行うため、必然的にに重点が置かれることになる。ここでいう意味的動機づけとは、本論の主旨においては、多義の発生原理または(多義発生をもたらず)認知操作とほぼ同義とみなして差し支えない。

3. 品詞別の特性

ところで、ある語が多義であるとひと口に言っても、その性質は品詞によって、そして語によってさえ異なる可能性がある。多義に関する研究はこれまで数多くなされてきているが、品詞論と多義語の多義性を正面から論じたものはない。そこで、本稿では品詞別の特性を踏まえながら、特に、名詞、動詞、形容詞の多義について現場の通訳事例を対象にしながら分析していくものとする。それぞれの品詞の特性に基づく多義の捉え方を概観しておく以下ようになる。

まず、名詞の特性は、おおまかに言えば、それが知覚対象を指すのであれ観念対象を示すのであれ、なんらかの対象をモノ的に捉えて指示する働きにある。この名詞において多義が問題となるのは、概して身近な知覚対象を指示する一般名においてである。一般名が有するとされる複数語義は、語とその指示対象の対応関係にゆらぎが生じることから発生すると考えられるが、ここで課題となるのはそのゆらぎがいかなる動機づけによって生じるのかを原理的に詳らかにすることである。ここで関与すると考えられるのが、「情景投射」「換喩」「文脈調整」「動作図式の焦点化(動詞派生名詞の場合)」の4種の認知操作である(佐藤・田中 2003)。

次に、動詞には、観点の採り方次第で、能動性、他動性、動作・状態・過程、アスペクト・テンス・モダリティなどの複合的な要素が関与するため、その意味的性質の分類も一筋縄にはいかない。しかし機能という観点から言えば、動詞にはモノ(名詞)を関連づけてコトを描写するという働きがあるのは確かである。すなわち、動詞の意味は多分に関数的性質を帯びていると言える。動詞が有するこの関数的な意味の振幅を的確に把握するに当たっては、文脈に左右されない中核的意味をコアとして抽象し、

そこに項としての名詞が作用することによって文脈依存的な差異が生じるという捉え方がなされる(田中 1990)。コアとは語の中核的意味を図式的に抽象化したものであり、これは、身体性、空間認知、関数的性質を鍵概念として動作動詞および前置詞において有効な理論装置である(コア図式論については田中 1996)。動作動詞の多義発生契機となる認知操作として考えられるのは、ひとつには変数項(名詞)同士のあいだで典型的イメージが「投射」されることによって起こる比喩的拡張があげられる。また、図式そのものに「焦点化」が作用して動詞に多義が生じる場合もあり、さらに、空間詞(空間的図式を有する前置詞または副詞)との「図式融合」が動詞の多義をもたらすこともある。

形容詞の用法については、ある性質や状態をモノに組み込んで名詞句を形成する場合(限定用法)と、モノについてある性質や状態を描写してそれをコトとして差し出す場合(叙述用法)があるが、いずれにせよモノを質的に差別化するはたらきがその本質にあることは変わらない。ゆえに、形容詞の意味を分析する際には名詞との共鳴関係に焦点を当てて、共起する名詞に関してクラスター分析を施すことが求められるであろう。

4. 概念形成の視点

人は一般に、コトバを使ってやりとりをするとき、そのコトバにまつわる記憶を喚起して意味づけを行う。であれば、記憶の異なる個々人がコトバの意味づけをしながら互いに分かり合えるという実感が得られるためには、記憶の差異によって解消されないような共通の土台があるはずである。この共通の土台には、語の意味知識、文法、語り口(慣用表現、言説の型など)に関わるものがあると考えられる。その中で、ここでは、語の意味知識を支える概念形成のプロセスが認知操作の機制として人々に共有されているという可能性に注目する。概念形成とは、差異化・一般化・典型化の相互作用を通じて典型概念(プロトタイプ)が形成される過程のことである(意味づけ、コトバ、記憶、意味知識、概念形成について詳しくは、深谷・田中 1996、田中・深谷 1998)。

たしかに、概念形成のプロセスがいかなるバランスで作用するかは、品詞や語の性質に応じて相違もある。ここでは、名詞と動作動詞についてその概要を述べるに留める。まず、同じ名詞でも一般名と抽象名では事情が異なる。一般名であれば、差異化・一般化・典型化を経て典型概念が獲得される。例えば、イヌという語を獲得しつつある幼児が、これもイヌ、それもイヌ、あれもイヌという指示を経験していくとしよう。このような一般化を行うときには、自覚的であるか否かに拘らず、これは例えばネコではなくてイヌであるという差異化も同時に行われている。ネコを指してイヌと言ったのではコトバが正しく使われていないことになるからである。この差異化と一般化の同時並行の過程を繰り返していくうちに、やがて「イヌ」とはどのようなものかと

いう典型的なイメージが定着してくる。すると、「かわいいイヌ」とか「変なイヌ」などといった表現も可能になる。これらの表現は、イヌが典型的にはどのようなものかという概念が成立していることが前提となって初めて成立するものである。そして、ここで安定性を得た典型概念が今度はさらなる差異化・一般化の基盤として作用する。このように、一般名においては、指示経験を通じて差異化・一般化が並行して典型化を促し、そこで生じる典型概念が、翻って差異化・一般化の基盤として作用するといういわば三つ巴的な概念形成プロセスが成立する。これに対して、「愛」「平和」「倫理」などの知覚対象をもたない抽象名においては、大まかに言えば、定義を通じて意味範囲を鮮明にすること(差異化)が主な課題となるものの、典型化の契機は生じにくい。

また、名詞と動詞を概念形成のプロセスにおいて比較すれば、名詞においては、差異化の過程で概念の階層性(上位・下位というタテの差異化)が生じ、集合概念が成立するのに対して、動詞にはそれが生じない。動作動詞は常に固有の動作との関連で把握され、それが身体知として図式化されるものの、他の動詞との間で階層化されるものではない。「歩行」は「移動」の一種であると言えば、それはすでに名詞化された概念における階層性なのであって、「歩く」は「動く」の一種であるとは言わない。つまり、集合概念は名詞にのみ生じるものなのである。

しかしながら、動作動詞においても、類似の動作概念との差異化(ex.「ドアが閉まらないようにちょっと押さえて」と言うとき Hold the door open. とするが、ここで keep を使うと「閉まらないように(しばらく)見張って」となるため、この場合は keep の使用を控える、という hold と keep の差異化)種々の文脈への一般化(ex. hold の目的語として、a pen, a baby, a party, the line, your tongue などさまざまな対象を受け入れることができるという語の使用における一般化)が前提となって、典型的な動作の図式を抽象することができる(ex. hold :「一時的に抑えておく」というコア図式)という点で、やはり概念形成が関与しているということは確かなのである。

ここでは、概念形成の過程について名詞と動作動詞についてのみふれたが、その主旨は、差異化・一般化・典型化から成る概念形成のプロセスは、品詞や語の性質の相違に応じた形でそれぞれ作用しているという点にある。また、典型概念が安定性を獲得していることが、ある語が多義性を獲得するにあたっての十分条件とは言わないまでも必要条件として作用するという想定を引き出しておくことが今ひとつのねらいである。知覚対象をもたない抽象名において一般に多義がさほど大きな問題とならないのも、おそらくは典型化の契機を欠いているということが起因していると考えられるのである。

以上述べたような、品詞に応じた多義の性質と概念形成の過程を踏まえて、具体的な事例の分析を行っていくことにしたい。

5. 通訳現場における事例

以下、おもに経験豊富なプロの同時通訳者が実際に通訳の現場で扱った事例を紹介する。紙幅の制約により、各語彙項目について訳語の観点から注目に値する事例を少数に絞って挙げた。なお、訳例および訳註はすべてこの通訳者本人によるものである。

5.1 動詞

5.5.1 take

- (1) What does it **take** to get my name back?
「汚名をそそぐにはどうしたらいいのだろうか。」
- (2) Now I heard that your show is going to be **taken** off the air.
「番組が放送中止になると聞きました。」
- (3) **Take** it or leave it.
「決心しなさい。」(註:「のるかそるか」「二つに一つだ」「一か八か」「これ以上待てない」なども可)
- (4) Politics doesn't **take** weekends off, and neither do we.
「政治に週末の休みはないのでこの番組にも休みはありません。」

5.1.2 hold

- (5) The New York Stock Exchange will **hold** two minutes of silence tomorrow morning at 9:30, delaying the opening bell.
「ニューヨーク証券取引所は明日の朝 9 時半に 2 分間の黙祷を捧げます。取引開始の合図も遅れることとなります。」
- (6) It's clear that Iraq will top the agenda for the G8 Summit, whatever the debate for the future **holds**.
「イラクが G8 首脳会談の議題で第一番目に来ることは、将来についての議論がどうであれ、間違いありません。」
- (7) Investors **held** back from placing orders today.
「投資家は今日、注文を出すのを控えました。」(註: hold back は「自制する」「自粛する」の意味にもなる。[参考] The Martha Stewart and Enron trials are on hold. 「マーサ・スチュワート裁判とエンロン裁判は延期になっています。」)

5.2 名詞

5.2.1 paper

- (8) It's baffling how exam **papers** like these kept under strict lock and key would have ended up circulating on the streets of London.
「厳重に鍵のかかった部屋にあった試験問題がロンドンの街中に流出する事態になるなんて困惑しています。」

- (9) He left a **paper** trail.
「彼は文書に残った記録をおいていった。」
- (10) Show me your **papers**.
「証明書を見せてください。」(註：文書の意味もあるが、たとえば警察が参考人に身元確認ができる文書の提出を求める場合には訳例のような処理が可能)。

5.2.2 way

- (11) We have no way of knowing.
「知るすべもない。」
- (12) in a big **way**
「大々的に」

5.2.3 interest

- (13) **interest** payment on bonds
「債券への利払い」
- (14) I read your letter with great **interest**.
「お手紙は大いに関心をもって読みました。」
- (15) She is very **interested** in NBA.
「彼女は NBA に夢中です。彼女は NBA に非常に興味があります。」
- (16) Put **interest** of the American people first.
「まずアメリカ国民にとっての利益を第一に考えましょう。」
- (17) That agreement is to our national **interest**.
「この合意は国益に適っている。」
- (18) a person of **interest**
「参考人」

5.2.4 security

- (19) **security** in retirement
「老後の保証、老後の備え」
- (20) **security** check at the airport
「空港での手荷物検査」
- (21) US-Japan **Security** Treaty
「日米安全保障条約」
- (22) In Middle East peace talks, Israel focused on the issue of **security**.
「中東和平交渉においてイスラエルは治安の問題に焦点を絞った。」
- (23) a **securities** company

「証券会社」

(24) Exam papers are kept under tight **security**.

「試験問題は厳重な管理下におかれている。」

5.3 形容詞

5.3.1 good

(25) My **good** friend Condoleezza Rice usually agrees with me.

「親しい友人のライス氏はたいてい私と意見が合う。」

(26) There will always be **good** jobs for good candidates with good qualifications.

「立派な資格のある優秀な候補者には常にふさわしい仕事があります。」

(27) I'm in **good** shape.

「私は健康そのものです。」

(28) It looks **good** on you.

「それ、とってもお似合いね。」

(29) It's too **good** to be true.

「話がうますぎる。」

(30) She did a **good** job.

「立派な働きをした。」

(31) **Good** grief.

「なんてこった。」

(32) Despite all the talk, Democrats are saying little about who will pay to help Americans secure **good** care.

「なんのくんのといっても、民主党はアメリカ国民に高い水準の医療保険を与えるための財源をどうするのか、にはほとんど触れていない。」

(33) A man wanted for questioning in the California baby food scare says he needs a **good** lawyer.

「カリフォルニアでのベビーフード毒物混入事件で事情聴取を受けるといわれた男性は、腕のいい弁護士が必要と言っています。」

6. 事例分析

ここでは、上記の事例について理論的な見地から分析を試みる。以下、動詞・名詞・形容詞の順に論じることとして、それぞれの品詞について、上掲事例で挙げられた語彙項目をカバーしつつ、さらに一般性を有する多義分析を行うことをねらいとする。

6.1 動詞

動作動詞は、一般に、身体感覚に根ざした動作の図式をコアとして抽象することが

できる。この図式は名詞をモノとして位置づけてコトを表わすという意味において関数的性質を帯びている。この関数的図式をもつ動詞において多義が生じるのは、ひとつには、変数項となる名詞の抽象性に起因するものであり（投射）、今ひとつは、図式内のある特定の部分がクローズアップされることによるものである（焦点化）。

投射の例として、break をあげてみよう。break には、<外から力を加えて何かの機能を損ねる> というコア図式がある。そこで、The cat *broke* the vase. と His words *broke* her heart. は、それぞれ次のように関数的に扱えられる。

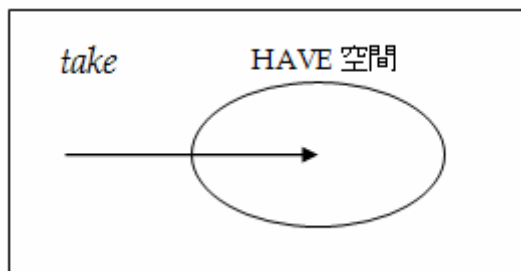
break [past] (the cat, the vase)

break [past] (his words, her heart)

この2つの例のあいだでは、何かを物理的に破損するという動作イメージが非物理的な事象へ投射されることによって比喩的拡張が起こり、そこに動詞の多義性が生じているという理解の仕方が可能である。

焦点化の例として、前記 5.5.1 に挙げられている take の事例をみてみよう。take には <自分のところに取り込む> というコア図式がある（図1）。「自分のところ」とは自分の HAVE 空間である。HAVE 空間とは、典型的には所有空間を示すが、そこから経験空間に拡張されることもある。take のコア図式には、A:「あるところから何かをとる」、B:「何かを（手に）とる」、C:「何かを自分のところに取り込む」の3つの焦点化の側面がある。これらのどこをクローズアップするかによって、take の用法に3つのクラスターが形成される。

図1 take のコア図式



<自分のところに取り込む>

(参考:『E ゲイト英和辞典』p. 1694)

A では「何かをどこから取る」「奪う」という点が強調されるため、「どこから」という場所を示す take A from B, take A out of B などの表現が生じやすくなる。from や out of などの空間詞に注目すれば、それらが take の焦点を定める梃子のごとく機能していると捉えることもできる。They *took* a bag *from* her hand. や She has *taken* most of the money *out of* my bank account. は、A に焦点化がなされて物理的な行為を表しており、She *took* her elegance *from* her mother. では、そこに投射が関与して比喩的な拡張が起こっている。

事例 (2) では、*your show is going to be taken off the air* が「(番組が) 放送中止になる」と訳されている。*off the air* は言うまでもなく *on the air* との対比で把握される。*on/off* はスイッチオン・オフから連想される通り、それぞれ「接触」から「連続」へ、「分離」から「停止」へといわば空間軸から時間軸へと展開される。そこで、*take ... off the air* とは、物理的にイメージすれば <何かを the air から取って離す> ことであり、それがここでは番組を放送網から外すこと、つまり放送中止を示すことになるのであろう。「分離」を示す *off* と共起していることから、この *take* は「何かをどこから取る」局面が焦点化されていると捉えるのが自然であり、そのことから、この成句的表現は物理的な運動のイメージを不可視の現象に投射することによって成立したものだと言えるであろう (*take ... off the air* という成句には名詞 “air” の多義問題も関わるが、その点については名詞の項でふれる)。

事例 (4) の *Politics doesn't take weekends off* では「政治に週末の休みはない」と処理されているが、ここでは要するに「休暇を取る」ことが話題になっている。この *take...off* では、*off* が直後に名詞をもたずに副詞化しており、何から分離するのは明示されていない。しかし、空間詞としての副詞は同形の前置詞と意味的に連続しており、たとえば *take your coat off* もあえて言えば *take your coat off (your body)* から自明の情報がそぎ落とされた結果として生じた表現とみなすことができる (実際に使用可能という意味ではなく、あくまでそのように分析可能であるということ)。そこで、*take off* の対象として *your coat* と *weekends* を比較してみれば、そこには典型的な物理的对象と非典型的な観念対象という格差があることがわかり、この種の具象から抽象への投射が行われることが動詞の多義に貢献し得るということが理解される。

take の焦点化の 3 つの側面のうち B は「何かを手にとる」ものの、まだ完全に自分の HAVE 空間には取り込んではいない局面を示す。ここでは、移動が強調されることもあり、*take A to B* はその典型である。He *took* his pen and started writing. はつかんだところを強調する例であり、Will this bus *take* me to the museum? や The nurse *took* him his lunch on a tray. などでは移動が前景化されている。

C は、何かを完全に HAVE 空間に取り込むところを問題とする。そこから、「...を受け取る」「...を摂取する」「...を飲む」「...を耐える」「(主体的に) ...する」「(時間が) かかる」などの語義が生じ、それらの例として、I don't *take* bribes. / Why don't you *take* some cough medicine? / I can't *take* your singing any more. / Let's *take* a break. / It *took* me two hours to read the novel. などがあげられる。

事例 (3) *Take it or leave it.* は「決心しなさい」と工夫を伴った訳出がされており、註で「のるかそるか」「二つに一つだ」「一か八か」「これ以上までない」という興味深い訳出の可能性も示されている。これらを *take* の意味とその訳語という観点で議論するには、少なくとも、*it* が何を指すかという対象把握の問題と、この命令形がいかなる発話意図を担っているか (例えば「催促」「激励」「警告」「脅迫」などのどれに近い

かなど)という語用論的な視点が、状況変数とともに判断材料として与えられる必要がある。ここでは、*Take it or leave it.* における *take* の理解は *it* の対象把握に影響を受けるという点を指摘しておきたい。

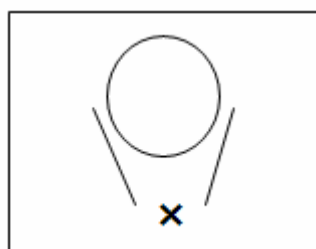
上記訳例では、*take* の対象 *it* を出来事次元で捉えて、「(主体的に)何かをする」という語義に沿った解釈がなされていると考えられる。註に与えられた例もその点については同様である。おそらく、この表現は行為の遂行が問題とされる場面で使うのが自然なのであろう。しかし、以下のような解釈も可能性としては排除しきれないはずである。すなわち、*it* が眼前のモノを指して、*take* が「手に取る」「持ち去る」などと即物的に解釈される場合である。その際、*leave* のコアが <持って行かずに(そのままの状態にして)去る> であることを確認すると、ここで問題とされる表現は、まずモノを対象とする次元で *take* するか *leave* するかという二者択一的イメージが前提にあって、それが行為に応用されて抽象的な次元で成句化していると考えられるであろう。

事例 (1) *What does it take to get my name back?* では、「汚名をそそぐ」という訳出が行われている。ここでは、*to get my name back* という行為が何を必要なものとして「取り込む」という意味あいでは *take* が用いられている。つまり、人ではなくて行為が何を *take* するのかを問うているのであるから、その意味で抽象的な領域に投射されている例であることは明らかである(一般に、無生物主語構文はこの種の擬人的表現とみなすことができるが、その際、動作の図式に対する変数項のうち特に主語における典型項(人)と非典型項(無生物)のあいだで投射が作用していると考えられる)。

ところで、動作動詞は空間詞と結合して「図式融合」を起こす場合があるということはずでに指摘した。上に分析を試みた用例中にも空間詞と共起するものが複数あったが、それらは概してそこに含まれると考えてよい。ここで、*take* が空間詞と図式融合を起こす例として *take over* について補足しておきたい。この句動詞には、*The new teacher took over Mr. Wilson's class.* と *A big French company has taken over our firm.* にみられるように、「(...を)引き継ぐ」と「(...を)支配する、乗っ取る」という異なる意味がある。前者では、*take* の「取り込む」局面が焦点化され、その取り込みの経路を示すものとして *over* が合成されている(*over* のコア図式は <(弧を描くように) ...を覆って> であり、焦点化の側面として「上を越えて」「真上に」「全体を覆う」「越えた向こうに」の4つがある)。後者では、*take* の「取り込む」と *over* の「全体を覆う」がそれぞれ焦点化されて図式融合が起こり、<対象を管理下におく> という意味合いの表現になっていると捉えることができる。

次に、5.1.2 の *hold* について分析を行う。*hold* のコア図式は <一時的におさえておく> であるが、基本的には手を使って抑えることを示し、対象が動きを伴う場合には「一時的に動かないようにしておく」という意になる(図2)。

図2 hold のコア図式



<一時的におさえておく>

この hold の個々の用法は、コア図式からみればかなりスムーズに把握できる。それに対して、訳語から hold を把握しようとする、それはまったく語の統一的理解を阻んでいると思わせるほどに多様である。

hold the bag (そのバッグを (一時的に) もつ) / *hold a baby* (赤ん坊を抱く) / *hold your hand* (君の手を握る) / *hold an idea* (ある考えを抱く) / *hold a meeting* (ミーティングを開く) / *hold the record* (記録を維持する) / *hold the line* (電話を切らずにおく) / *hold the door open* (ドアを閉まらないようおさえておく) / *Hold your tongue.* (黙れ) / He can *hold his liquor* (彼は酒が強い (酒の酔いを抑えられる)) / *hold on a second* (ちょっと待って) / *hold back tears* (涙をこらえる) / *hold up a rifle* (ライフルを構える) / *hold on to the rope* (ロープをつかんで離さない)

(参考 : 『E ゲイト英和辞典』 pp. 785-787)

概して、通訳・翻訳の力は訳語のストックと混同されやすい。しかし、この hold の例を見てもわかる通り、訳語をいかに多数揃えたとしても、語の意味を統一的に把握できるという結果は保証されない。2 つの言語が異なる体系に属するものである以上、素朴に訳語の集積を行うことがその語の意味世界を網羅的に把握することになると考えるのは理論的根拠を欠いている。やはり、訳語から一旦切り離して、語の意味を正面から分析し、その内部構造を描き出すことが不可欠である。起点言語における語の意味世界のかような把握を前提に、目標言語での訳語のストックを増やすことを通訳・翻訳の教育の場面で促してゆく必要があるだろう。

ここで、5.1.2 に挙げた事例についてみると、事例 (5) の *hold two minutes of silence* は「2分間の黙禱を捧げる」と訳出されている。この日本語から hold の意味を割り出すのは容易ではないが、コア図式から分析すればこの hold は事柄を対象としている点で、例えば *hold a party* と比較的近い用法であることが分かる。あとは日本語の問題である。というのは、日本語ではパーティーを「開催する」とは言うが、黙禱は「開く」のではなく「捧げる」対象として把握されるからである。この事例からも、コア図式的な把握があれば、訳語が大きく異なる場合であっても比較的容易に対処できるということがみてとれる。

事例 (6) では、whatever the debate for the future *holds* の部分が、「将来についての議論がどうであれ」と訳出されている。これは字義通りには「将来へむけての議論がかかえて (hold して) いる対象が何であれ」ということであり、*hold a baby* のようなメージが投射された抽象表現とみなすことができ、主語に注目すれば擬人化も作用していることが確認できる。

ところで、hold にも空間詞と図式融合を起こす句動詞表現が多くあるが、ここで *hold back*, *hold on*, *hold on to* についてふれておきたい。*hold back* は、「何かが前に出ないようおさえる」ということから、「...を阻止する」「(感情など)を抑える」「(事実など)を隠す」「ためらう」などの意が生じる。事例 (7) では *held back from placing orders* が「注文を控える」とスムーズに処理されていた。これは、*hold back* を自動詞化してさらに from 以下を合成した表現と捉えられるが、*hold back* の対象をあえて復元してみれば、*hold SELF back* と理解することが可能であろう。つまり、自分自身が出ないように抑えるということであり、そこに from doing が合成されて、結果的に行為から距離を取ることが示されることになるのである。

Hold on. という表現は、電話口で使えば「切らずにお待ちください」となり、眼前の人に対して使えば「ちょっと待って」となる。前者は、「電話線がつながっている on の状態を hold する」という解釈であり、後者は「動きの連続している on の状態を hold する」という捉え方になる。on のコアは「接触」だが、on duty のように時間的継続性を含む事柄との接触を示すものとして「連続(性)」が派生義として浮上するであり、それは go on and on のような副詞にも受け継がれる。この「接触」と「連続」のどちらがより前面に出るかに応じて、*hold on* にも微妙なニュアンス差が生じることがわかる。また、これは hold の対象が静止物の場合と動的性質を帯びる場合の双方をカバーできることと対応している。*hold on to* は、to が対象と向き合う状況を示すことから「対象と向き合って (to) それとの接触状態 (on) を抑えておく (hold)」という意味合いになり、典型的には *hold on to the rope* などの用法が得られる。こういった捉え方は、動作動詞と空間詞のコアを想定して両者の図式を融合させることによって初めて可能となるものであり、句動詞の指導法や辞書記述のあり方にも大きな示唆を与えるものと思われる。

ちなみに、*on hold* は名詞化した hold が「連続」を示す on と合成して、停止状態の連続を示す表現である。事例 (7) の訳註にある参考事例で...trials are *on hold* が「(裁判が)延期になっています」と訳出されているのもそういう事情による。*on hold* には「(計画などが)延びて、延期して」の他に、「(電話口で)待たされて」となる場合もあり、He was *put on hold* for three minutes. はその例である。この *on hold* は *hold on* から派生した表現であり、その展開からも、「電話を切らずにおく」と「ちょっと待つ」の間に連続性があるということが改めて実感される。

参考に、名詞化した hold の語義をあげておくと、「つかむこと」から「支配」「停

止」「延期」への展開がみられ、さらに「つかむところ」となることもある。これらは、名詞の項で述べる「動作図式の焦点化」の例である。さらに、音楽の文脈においては「休止（記号）」、柔道やレスリングの場面では「抑え込み・ホールド」ともなるが、これは名詞の項で述べる「文脈調整」の例として位置づけられるものである。

6.2 名詞

名詞については、「リンゴ」「ネコ」「クルマ」などのように、指示対象を具体的に指し示すことができ、それを複数の同種のものに拡張して使えるような一般名については、対象指示の経験を通じて典型概念（プロトタイプ）が獲得される。名詞の多義性はこの典型概念に対する種々の認知操作から生じてくるものであり、そこには「情景投射」「換喩」「文脈調整」「動作図式の焦点化（動詞派生名詞の場合）」の多義発生原理が関与していると考えられる。また、これらの原理が協働して名詞の多義を生むケースも頻繁に観察される。以下、上記4つの多義発生原理について述べるが、その中で5の事例における名詞の語彙項目についての分析をも行うものとする。

第1に、「情景投射」とは、ある名詞が有する典型的な情景（イメージ）を通常とは異なる領域に投射することによって多義が生じる場合を指す。the *head* of a hammer（ハンマーの先端）や the *mouth* of a volcano（火山の火口）のように具象領域から別の具象領域への投射もあれば、the *heart* of the matter（事態の核心）のように具象領域から抽象領域への投射もある。また、「情景」と呼ぶものの、投射されるイメージは視覚的次元に限定されない。たとえば the *key* to a happy marriage（幸福な結婚生活の秘訣）のように機能面等が前景化する場合もある。

広義には情景投射もメタファーの一種とみなしてよいが、メタファー自体を論題とする場合はおのずと議論の方向性が異なる。本格的な隠喩論としてメタファーを扱う際には、<AはBだ>という形式をもつ「創造的隠喩」と、ここで情景投射と呼ぶ「擬態的隠喩」を種分けして議論する必要がある（両者の相違については深谷・田中1996）。本論では、名詞の多義発生原理として擬態的隠喩に相当する情景投射に注目するが、それは慣習の力によって独立した語義が成立しやすいという理由による。創造的隠喩はその名が示すごとく言語使用のたびごとに創造的な解釈へと開かれていくために、新たな語義の確定は起こりにくい。それゆえ、多義の議論においては一般に射程外に置かれることになる。

情景投射との関連で連語的環境で生じる多義性についてもふれておきたい。例えば、She *has an eye for* contemporary art. では *have an eye for*（…を見る眼識がある）が連語として使われている。このとき、an eye だけで「眼識」という語義を獲得しているというよりも、むしろこの連語そのものが擬態的な状況を描いており、そこから遡ってその連語内の名詞に訳語をあてがおうとすることによって、その名詞の指示対象が抽象的次元で探り当てられていると考えられる。先にふれた、*take...off the air*（…を放

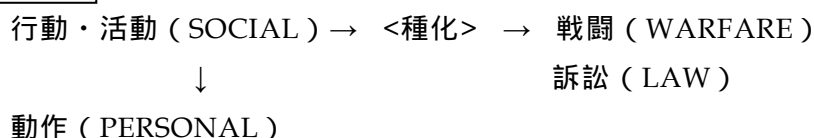
送中止にする)も、air 単独で「放送」を示しているというより、成句単位である種的情景を描いていると考えられるし、また、*get my name back* (汚名を返上する)も、奪われた名前をモノのごとくとらえてそれを *get back* する情景がイメージされているのであって、(my) name が直接「名誉」を示すとは言い難い。これらは、名詞の多義として議論するよりも、むしろ比喩的な慣用表現を単位として分析・記述していく方が言語使用の実態にも即しているし、学習という観点からみてもよりふさわしいと言えるであろう。

第 2 に、「換喩」によって生じる多義とは、ある名詞が通常示す対象からそれと関連する何かへと指示対象を横滑りさせることによって成立するものである。たとえば *angry eyes* は身体部位としての視覚情報を取り込む「目」そのものではなく、その周辺の「目つき」を指すものであるし、*near-sighted eyes* (近視)では指示対象が機能面へと横滑りしている。このように換喩は身体部位の機能を示したりする例が主で、一般的に、情景投射と比較して抽象的で意外な派生義は生じにくい。換喩は具象から抽象というレベルの異なる概念領域間を架橋し得るメタファーとは異なり、同一の概念領域をめぐって作用する (Lakoff 1987)。それゆえ、換喩においては想像力の飛翔は相対的に許容され難く、それが派生義の遠心作用を制御していると考えられるであろう。

厳密に言えば、比喩表現の一形態としての換喩は、あくまで述部との共振作用で起こる現象である (深谷・田中 1996)。I like reading Heidegger. で Heidegger が人物でなくその作品を示すというのは、like reading という述部があって結論づけられることである。換喩によって確定語義が生じているとされるのは、その語を使用する毎に述部との共振作用 (に基づく指示対象の横滑り現象) を経なくても、その名詞と指示対象との関係が慣習的に定着していると考えられるものである (アドホックな換喩と換喩的多義を分けるものとして Panther, Klaus Uwe and Günter Radden (eds.) 1999 中の Peter Kosh)。

第 3 に「文脈調整」とは、ある名詞を取り巻く文脈をシフトさせることによってその名詞の多義が生じる場合を指す。たとえば action は社会的文脈では「行動・活動」だが、戦争という文脈では「戦闘」、法廷では「訴訟」となる。また、個人的な文脈であれば「動作」となる。これらはいずれも「行動」の一種であり、個々の文脈の相違からそれぞれの語義が生じていると考えられる。

action



The time has come for *action*. (行動の時が来た) / soldiers killed in *action* (戦死した兵士たち)
/ a civil *action* (民事訴訟) / a graceful *action* (優雅な動作 [身のこなし])

(参考: 『E ゲイト英和辞典』 pp.18-19)

同種の文脈調整の例として、5.2.1 の事例に取り上げられている *paper* がある。この名詞は素材としての「紙」を表すだけでなく、以下のように「紙」に種化(垂直方向 [概念間] の差異化)と汎化(水平方向 [事物間] の一般化)が同時に作用することによって、「新聞」「答案」「書類」「論文」などの語義を有することとなる(種化、汎化について詳しくは田中・深谷 1988)。

paper

紙 → <種化> → 新聞 / 答案 / 書類 / 論文

a daily *paper* (日刊紙) / mark a *paper* (答案を採点する) / important *papers* (重要な書類) / He published a *paper* on language and mind. (彼は言語と精神に関する論文を出版した)

(参考: 『E ゲイト英和辞典』 p. 1187)

事例 (8)では、*exam papers* が「試験問題」と訳出されている。ここでは *papers* が *exam* によって文脈を与えられて、まず「(試験の)問題用紙」を指すことになり、さらにここで問題となっているのは用紙自体ではなく、そこに記された情報の方であると判断される。このとき、慣習的な確定語義とは異なるいわばアドホックな換喩が作用していると考えられるが、それも(*exam*) *papers* という名詞(句)単独で起こるのではなく、あくまで *It's baffling... would have ended up circulating* という述部との共振作用によって生じる解釈とみなされる。事例(9)では *a paper trail* が「文書に残った記録」と処理されている。これは複合名詞の問題だが、冠詞の問題を度外視すれば *paper money* (紙幣)と同様、紙を素材とする何かとして捉えられ、*a paper trail* で「紙でできた痕跡」となる。しかしこの *paper* が単なる素材としての紙ではなく、文字が記されたものとして個体認知がなされて不定冠詞を伴っていると判断でき、そこから上のような訳語へ辿り着くことも可能となるのであろう。

事例 (10) では、*Show me your papers.* が「証明書をみせてください」と訳されており、たとえば警察が参考人に身元確認を求める場合に可能な処理だとしている。これなどはまさに文脈調整の例と言っていい。つまり同じ書類でも文脈に応じて、「文書」「記録」「白書」「証明書」のように種々の処理が可能となるのである。

ただし、この *paper* については「名詞」の多義では済まない可能性もある。それは、不定冠詞や複数語尾の 's' を伴う名詞句次元で論じる必要があると考えられるからである。つまり *paper* は物質名詞としては素材としての紙であり、どこをどれだけとってそれ自体であることは変わらないという対象把握の仕方が、無冠詞単数形と

いう語形に反映されている。一方、「新聞」「答案」「書類」「論文」などはすべて普通名詞として処理されるが、それはこれらが単なる素材としての紙ではなく、そこに有意義な文字情報が記載されていて、そこから個体としての識別に基づく単一化が可能（容易）になることから、不定冠詞や複数形を伴う語形が受け入れられるという事由による。つまり paper と a paper (papers) は、異なる対象を指す異なる名詞句ということになる。glass が素材としてのガラスを指すのに対して、a glass で「コップ」、glasses では「(複数の)コップ」または「メガネ」を指すというのと同様である。また、an apple で「1個のリンゴ」、apple だと「すり潰したリンゴ、スライスしたリンゴ」を指すというのと軌を一にする問題である。この名詞句の対象把握については、time などの抽象名にも関連するものだと考えられるが、この論点は今後の課題としておきたい。

ところで、文脈調整型の多義を把握する際に求められるのは、言うまでもなく当該のコンテクストを把握することであり、またその前提となる背景知識を有していることである。このことは、例えば agent を「代理人」とするか「スパイ」とするか、また president を「大統領」「総統」「社長」「頭取」などのうちどれで訳すかなどの事例を想定すると分かりやすい。しかし、これらは語そのものの多義というよりも、むしろ訳語の多様性に過ぎないという可能性もある。agent は「誰かの意向を受けて振舞う者」と捉えられれば、それが一般の個人や組織との関連におけるものか諜報活動に関するものかという文脈変数で調整可能になる。また president は「組織を統括する人」と捉えられる点は同じであって、あとは文脈差に応じて訳し分ければよいということになる。これを多義と呼ぶべきか否かは多義の境界線画定に関することであり、この点に関する考察も今後の課題である。

ここで、文脈調整の例としてやや抽象的な way をみておきたい。way とは road や street とは異なり、眼前に存在するものではない。その意味で、way はその指示対象の性質において抽象的である。しかし、抽象的でありながら way はまたかなり単純な図像（図式）的イメージを有しているとも思われる。たとえば、一本線または矢印のようなイメージを way から想起することはさほど難しくない。おそらくはこのイメージが軸となって、複数の異なる文脈にまたがる使用が可能になるのではないかと思われる。way の中核的意味は <(今ある地点から目指す地点に至る)経路> であるが、それが、身体的な移動の経路であれば「道」となり、行動の経路であれば「方法」となり、思考の経路であれば「意味、点」などとなる。

way : <(今ある地点から目指す地点に至る)経路>

You are in my way. (physical) → [換喩] → Come this way. / It's a long way.

Do it this way. (procedural) cf. It's way too early to tell. (副詞)

It's true in a way. (conceptual) (参考:『Eゲイト英和辞典』p.1879)

ちなみに、「道」から換喩を経ると「方向」「距離」等の語義へ展開し、さらに「距離」から副詞に転じて「はるかに」という意味の用法も生じる。

action や paper との相違を言えば、way の場合は、中核的語義とされるものが抽象的で直接的に知覚対象を指示し得ないという点が指摘できる。way はあくまで具体的な文脈が与えられて個々の語義に達するものであって、たとえば paper が最初から「紙」を指すというのとは事情が異なっている。しかしいずれにせよ、個々の文脈が調節されるにあたっては、その上位概念にあたるどころにその語の中核的語義（または基本義）があるという意味で、概念的階層性が関与しているということは確かであろう。

さて、5.2.2 に挙げた事例 (11) の *We have no way of knowing.* は、行為遂行の経路としての way が用いられており、ここで「知るすべもない」とするのは自然な訳出である。「すべ」は「方法」と同じ次元にあり訳語の幅の問題に収まる。one's way of life の way も「仕方」「流儀」「様式」「習慣」などと訳せるが、これらの訳語も同じレベルで捉えることができる。事例 (12) の *in a big way* は「大々的に」と訳されているが、これは行為遂行の仕方が大規模であることを示すもので、たとえば *advertise a new product in a big way* のように用いられる。

第4に「動作図式の焦点化」とは、動詞派生の名詞において、動作の図式に対して焦点化を行うことによって多義が生じる場合である。一般的に、派生名詞においては派生経路に目配せした分析が求められるが、派生名詞の中で最も多いのがおそらく動詞派生であり、そこで多義の発生原理として働くのが「動作図式の焦点化」である。これはもともと動詞の段階で有する動作図式を前提において、名詞化した後にもその図式のある部分（動作・結果・動作主・経路・手段など）が焦点化されることによって多義が生じるケースである。

例えば、pass では、動作と経路と手段にそれぞれ焦点化することによって以下のような語義の展開が生じる。

pass : <通過する>

<動作に焦点化> 通過；通行；合格

<経路に焦点化> 道；小道；細い道

<手段に焦点化> 入場[通行]許可証；入場券；乗車券

The bomber made a *pass* over the city. (the action of passing)

Ken got a *pass* in math. (the action of passing; abstract)

a free *pass* (a means to make possible the action of passing)

(参考：『E ゲイト英和辞典』 p.1196-1199)

「合格」は「通過」のイメージが投射されており、「入場 [通行] 許可証」では<通

過する> という動作図式との関連でその手段に焦点化されている。が、この手段は<通過する>という図式にあらかじめ含まれているとは言い難いから、動詞の段階における焦点化とは赴きを異にしている。この種の事例では、動作図式を取り巻く概念領域をめぐって換喩的横滑りが作用しているという把握の仕方も可能であろう。

ここで、動作図式の焦点化の応用例として *interest* について見ておきたい。これは、動詞においては動作というより心理的活動に関するものであるから、動作図式という表現は的確ではないが、それでも動詞の段階における図式的または関数的な意味構造が名詞に転じた後にも強く影響を及ぼすという点で同様の分析が可能である。

interest は<興味・関心を与える>という意味をもつ動詞であるが、これを関数的に捉えたと *interest*(X, Y)において、X = 物事、Y = 人という制約の存在が指摘できる。そして、焦点化が作用するのは主としてこのXまたはYに対してであると考えられる。Yに焦点化すれば人間の精神内の事象への呼称となり、Xに焦点化すれば人間精神に働きかける側の何かを指すという具合である。この語できわめて興味深いのは、日本語で「利益」「利子」というと「興味」「関心」からはおよそ隔たった感があるが、英語の語の意味として考えた場合には必ずしもそうは言えないということである。実はこれらは、人生一般の「関心事」を特に利害関係や財政状況という文脈へシフトさせることによって得られる語義であるから、焦点化と文脈調整の協働の産物であるといえることができる。「利子」と「関心」が単に訳語上の相違で複数語義でないなどと主張するつもりはないが、それでもこれらの訳語の語感を与えるほどの距離感英語の語義間には感じられないのではないかと改めて考えてみることに大きな価値があると言えよう。

interest INTEREST (X, Y) — X interest Y
[X = -human ; Y = + human] ← focusing

<Yに焦点化> 興味；関心

<Xに焦点化> 趣味；関心事；面白み；利益；利子

Do you have any special *interest* in Jazz? (ジャズに特に関心がありますか) / She has wide *interests*. (彼女は趣味の幅が広い) / places of *interest* (名所 (←面白みのある場所)) /

American *interests* are threatened in the region. (アメリカの国益がその地域で脅かされている) / annual *interest* (年利)

(参考：『Eゲイト英和辞典』pp.861-862)

さて、5.2.3の事例(13)の *interest payment* は *payment* と複合名詞を形成していることから、この *interest* が経済的な関心事としての「利子」を問題としていることが容易に分かる。事例(16)の *interest of the American people* も(17)の *our national interest* も常々人々に関心を与える問題として「利益」という意味合いが前面に出てい

る例である。(18) の a person of *interest* は「参考人」と訳されており、これは司法や警察などの文脈で使われる表現だと思われるが、発想としては *places of interest* が「名所」となるのと同様である。つまり、興味関心を抱かせる性質を帯びたものが場所であるか、人であるかの問題であろう。以上の事例は、いずれも、上の分析に従えば X の側に焦点化したものとして位置づけられる。それに対して、事例 (14) の I read your letter with great *interest*. は行為主体が抱く「関心」を問題にしており、そのことはこの *interest* が前置詞 with (コアは <…をともなって>) と共起しているということからもみてとれるであろう。

抽象名の議論

抽象名においては、概して定義を通じて意味範囲を明確にする(差異化を図る)ことが課題となるが、一般に典型化の契機は生じにくい。それは、抽象名が表す対象は物理的に指し示せるような存在物ではなく、むしろ言説によってその対象が浮上してくる観念対象であり、その語の意味の輪郭が言説依存的で曖昧であるためである。そこで、抽象名については問題となる名詞がどのように使われているかという(言説を分析する)視点が大切になる。

ここでは、形容詞派生の抽象名詞の例として *security* の分析を記しておきたい。この語は言説分析的な視点から把握される抽象的な語義に加えて、そこに換喩や文脈調整が作用して指示対象の具象性が高まっていく点で興味をそそる事例である。

security — secure であること [形容詞概念の抽象名詞化]

secure <危険や不安のない状態が確保された>

↓

security <危険や不安のない状態が確保された状態>

●安心(感)

Security is the greatest enemy. / Religion gave him a sense of *security*.

●安全、平穩、無事

live in *security* / He guaranteed our *security*.

●<…に対する>防衛(手段)、防御(策)、保安 <against/from> ----- [換喩]

security against [from] theft / Is there any *security* against [from] nuclear weapons?

●警備係 [部門] ----- [換喩]

Call *security*!

●保証、担保(物件)、抵当 ----- [文脈調整] + [換喩]

security for a loan / He borrowed the money on the *security* of his house.

●(ふつう *securities* で) 株券、有価証券

government *securities* 国債、公債

(参考:『Eゲイト英和辞典』p.1478)

「安心(感)」とは個人の内面において危険や不安のない状態のことであり、「安全」「平穩」「無事」とは、個人、家庭、社会のいずれにせよ、その周辺環境において危険や不安から逃れた状態を示すものである。「防衛」「防御」「保安」は security が against/from などの前置詞句と共に共起して、危険や不安の原因が明示されるときに生じやすい語義である。そこから「防衛手段」や「防御策」という訳語も自然と生じてくるが、ここにはすでに換喩が作用している。本来、ある状態を示すはずの形容詞派生(抽象)名詞が状態そのものではなく状態を確保する手段に指示対象を横滑りさせているからである。「警備係[部門]」も換喩が作用しているのは同様である。そして、物理的、身体的な安全性の確保が問題となっていた文脈から、商取引における安全性の確保へとコンテキストがシフトすると、「保証」「担保」「抵当」などの語義が成立する。これらは文脈調整と換喩が協働して生じる語義と考えられる。換喩というのは、これらも安全性自体ではなく、それをもたらす手段へとスライドしているためである。さらに、ふつう securities の複数形で用いて「株券」「有価証券」の語義を表すが、これは「担保」「抵当」などの語義が生じる場合と極めて近似した文脈において、習慣的に複数単位で有形物のごとく把握された結果として定着した語義であろう。

5.2.4 の事例に目を向けると、(19) の *security in retirement* は「老後の保証」と訳されているが、退職後にどのような安心(感)が与えられるのかということ、社会制度的な次元で捉えればこのような訳も可能となる。ここでもある種の換喩を織り込んだ解釈がなされていると言えよう。(20) の *security check* (手荷物検査) は、飛行場などで行われる安全性の確認と捉えられる。(21) の *US-Japan Security Treaty* (日米安全保障条約) は、国際的な文脈における安全性確保の問題として理解されるものである。(22) の *the issue of security* (治安の問題) は、ここで扱われている特定地域(中東)における情勢から地域の安全性確保の問題と捉えられた結果として生じる訳である。(23) の *a securities company* (証券会社) は、*securities* がすでに *security* と異なる指示対象をもつ名詞として確立していることを示す複合名詞であると言えるであろう。(24) の *Exam papers are kept under tight security.* (試験問題は厳重な管理下におかれている) は、ある種の防衛措置としての *security* であることがわかり、試験問題が扱われている文脈であるということから、「警備」などを避けて「管理」という訳語が選択されていると考えられる。

6.4 形容詞

形容詞は名詞あつての語であり、多義性についても形容詞単独で生じるというよりも、名詞との共鳴によってそれが感得されるものである。そこで形容詞の意味を分析するに当たっては、それと共に共起する名詞のクラスター分析が欠かせない。

5.3.1 に事例としてあげられている *good* について言えば、共起する名詞を「人の身体・性質・能力」「物」「行為・活動・考え」「状況」「数量・程度」の4つのクラス

ーに分けることができる。そして、これらすべてに共通する *good* の意味を抽象すると <評価が高い> となる。形容詞の場合、動作動詞や前置詞に有効なコア図式が成立するわけではないが、中核的意味を抽出しつつ語義の位置づけを行う作業が欠かせないのは同様である。

good : <評価が高い>

評価の度合いには「悪くない」から「完璧な」まで幅がある。

I 人の身体・性質・能力などを評価して

(体調が)よい	be in <i>good</i> health
親切的な	The woman was <i>good</i> to me.
行儀のよい	What a <i>good</i> boy!
優秀な; 上手である	He is a <i>good</i> cook.

II 物を評価して

高品質な	a <i>good</i> watch
適した	<i>good</i> medicine for hay fever
おいしい	This coffee is <i>good</i> !

III 行為・活動・考えなどを評価して

正しい; よい	Your <i>good</i> deed will be rewarded someday.
高く評価される	a <i>good</i> speech
(成績などが)よい	My test scores are <i>better</i> than last time.
有効な; 理にかなった	That's a <i>good</i> idea.

IV 状況の評価して

楽しい	I had a very <i>good</i> time at the party.
よいことである	It's <i>good</i> to learn something new.

V 数量や程度の大きさを強調して

たくさんの	He has a <i>good</i> stock of knowledge.
徹底的な	My mother gave me a <i>good</i> scolding.

(参考: 『E ゲイト英和辞典』 pp. 708-709)

このように分析してみると、上記の中で V の用法が日本語の「よい」と最も隔たっているということなどが明らかになり、その認識は通訳の実践において有益であるのみならず、英語学習の初学者に対する語彙指導においても重要な示唆を与えるはずである。

ここで、5.3 に挙げた事例を名詞句単位に絞ってみてみると、(25) の *my good friend* (親しい友人)、(33) の *a good lawyer* (腕のいい弁護士)、(26) の *good candidates* (優秀な候補者)などは、いずれも *good* が「人」と共起しているが、それが職業や立場

を表す場合には、単なる善良さではなく能力的評価が問題となるということがわかる。(26)の *good qualifications* (立派な資格)、(32)の *good care* (高水準の医療)などはある種のモノの質の高さを意味しており、(27)の (be) in *good shape* (健康である)は身体状況の評価を示す成句である。また、(28)の *It looks good on you.* (それお似合いね)は服装に対して、(29) *It's too good to be true.* (話がうますぎる)は耳にする話に対してのプラス評価である。

興味深いのは、(26)の *good jobs* (ふさわしい仕事)と(30)の *a good job* (立派な仕事)の処理の差である。この相違は、同じ仕事であってもそれが探す対象であるのか産物として他者の評価にさらされるものかという違いから生じている。また、(31)の *Good grief!* (なんてこった)は、*grief* (悲しみ(の原因))がたっぷりある状況を慨嘆する成句と考えられる。*My mother gave me a good scolding.* (私は母に散々しかられた)などにもみられるように、「徹底的な」という意味合いでは量的な度合いが目されるため、ときに *good* が否定的な内容の名詞と共起することもあるのである。

一般的に、形容詞訳出上の留意点をあげれば、形容詞の中核的意味は何か、名詞の指示対象は何か、名詞との共起から生じる形容詞の意味あいはいかなるものか、ということになり、これらの点を SL と TL の双方で確認することが求められる。(ときに、*He is a good cook.* を「彼は料理がうまい」と処理するように、SLにおける統語構造から離れて TL で表現を行う場合も当然ある)。

いずれにせよ、形容詞の意味把握の中核的課題は名詞との共鳴関係を把握することであり、それをふまえて上に述べたようなコロケーションの日英格差などに敏感になることが通訳者の資質としても求められるであろう。

7. 今後の課題

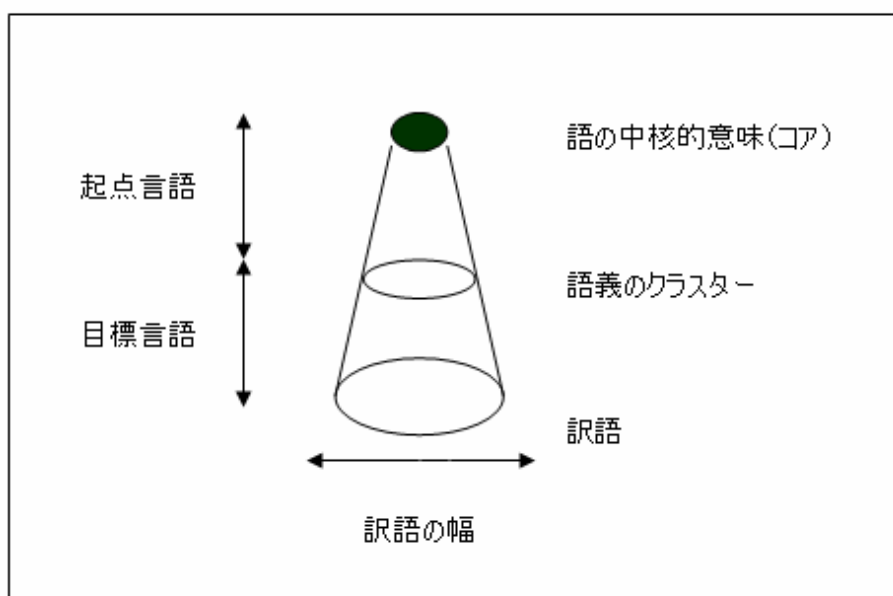
以上、本稿では品詞別の特性に応じた語の意味のあり方について、多義の構造に焦点をあてて理論的な考察を行い、それに基づいて現場での通訳事例について分析を試みた。通訳・翻訳の実践や教育において、起点言語における多義語を捉える上で本稿が主張する認知操作のメカニズムを意識することの実益は以下のとおりである。

まず、動作動詞と前置詞について妥当する「コア」という理論装置を実践や教育の場に導入すると、これまでは辞書を頼りに1対多対応で固定的に記憶していた訳語では文脈上不都合が生じていたような場合でも、コアを押さえておけば柔軟な訳出が可能となる。また、コアを想定することで意味の弾性に適切な絞りをかけることができ、誤訳が防止できる(図3において、コアを頂点とし、円錐形の底面として広がりを持つ「訳語の幅」に着目されたい)。コア概念により意味世界が如実に捉えられるため、イメージが湧きやすく意味表象がしやすくなるため、柔軟な訳出が可能となる。さらに、必要に応じて逐一辞書の訳語を探し読みするという従来の方法とは異なり、コアを基に自分で自由に訳語選択ができる状態になるので、訳語選択の自己モニターもコ

アに遡って瞬時に行うことができ、特に同時通訳のような時間的制約がある時の処理にも有効である。

また、「投射」「焦点化」「図式融合」といった多義派生原理を導入する実益を動作動詞と前置詞について見てゆくと、まず頭の中で獲得された抽象的なコアを文脈に合わせて具体的に適用する際の手掛かりを与えてくれ、適切な訳語選択が可能になる。そして、繰り返しになるが、コアにこれら派生原理を当てはめて文脈に応じた認知操作を行うことで辞書的な語義・訳語にとらわれずに柔軟に訳出できることが指摘できよう。

図3 語の中核的意味と訳語の幅



以上述べた動作動詞と前置詞に関する本稿の主張を基にした実践・教育の現場での実益は、他の品詞である名詞や形容詞においても同じく妥当するものである。名詞であれば、動作動詞と前置詞における「コア」に類するものとして、「典型概念」を挙げた。そしてこの典型概念を拠りどころに文脈に応じて「情景投射」「換喩」「文脈調整」などの認知操作を行うことによって、適切な訳語が選択できる。また、形容詞であれば、「コア」に類するものとして、共起する名詞のクラスター分析を通じてその形容詞が持つ中核的意味が抽出され、それを頼りに柔軟な訳出が文脈に応じて可能になることを見てきた。

更には、これまでは品詞別に多義の構造を詳らかにし、それぞれの品詞に妥当する多義派生原理に関する認知操作を的確に峻別して論述した研究はなかったが、本稿が試みた品詞別の分析により、各品詞がそれぞれ担っている統語上・意味上の機能の差異に応じたコアないし中核的意味の実相の相違に応じた多義の構造をより深く理解す

ることが可能となり、これらの議論は通訳・翻訳の実践・教育に資するものとする。

今後の課題は、この方向で更なる分析を重ね、冒頭に掲げた長期的展望、つまり、語彙、文法、慣用表現、言説の型、発話者の意図などの諸レベルを包括した重層的な議論への接続を行うことである。また、これまで提唱されている通訳・翻訳のプロセスに関するモデル論において、本稿が扱った起点言語における意味と目標言語における訳語の関係について、どのように位置づけていったらよいか、そして必要とあらば従来のモデル論にどのような修正をかけていったらよいかについても検討を要するだろう。特に、メンタルレキシコンに関する活性化拡散モデル(spreading activation model)、バイリンガルレキシコンモデルにおける語彙リンクと概念リンクに関する母語連結モデルと概念連結モデルなども、起点言語の多義語をいかに目標言語で処理するかの有力な理論装置として、通訳・翻訳のモデル論に編入する余地がある。

これらのことを念頭におきながら、更なる事例分析を行って、体系化を図ってゆくことが今後の課題である。

【謝辞】本稿を発表するに当たって、2004年8月1日に「日本通訳学会」第13回例会で「通訳現場での訳語選択の実践と理論」と題して発表させていただいたこと、また参加された皆様から大変貴重なご意見を賜ったことを、ここに感謝申し上げます。

筆者紹介：鶴田知佳子 (TSURUTA, Chikako) 東京外国語大学教授。日本通訳学会理事。IIC(国際会議通訳者協会)会員。コロンビア大学経営学大学院卒業、経営学修士(MBA)。NHK衛星放送通訳者、CNN同時通訳者、会議通訳者。近年は実践に役立つ通訳教育法の研究に関心を持っている。

佐藤芳明 (SATO, Yoshiaki) 慶応大学 SFC 研究所訪問研究員。田中茂範教授の CPN 理論、意味づけ論に基づく革新的な英語教授法を探求している。現在、語彙文法の体系化などに関心がある。著書に、『チャンク英文法』(共著、コスモピア)『Eゲイト英和辞典』(執筆、ベネッセコーポレーション)など。

河原清志 (KAWAHARA, Kiyoshi) 立教大学異文化コミュニケーション博士前期課程在籍、慶応大学 SFC 研究所訪問研究員。認知言語学の立場から通訳・翻訳理論、英語教育を研究。著書に、『チャンク英文法』(同上)『Eゲイト英和辞典』(同上)『Listening & Readingデュアル英語トレーニング』(共著、コスモピア)など。

【参考文献】

- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの＜意味づけ論＞』 紀伊国屋書店
 国広哲弥 (1981) 『意味論の方法』 大修館書店

国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.

Panther, Klaus Uwe and Günter Radden (eds.) (1999). *Metonymy in Language and Thought*. University of Hamburg: Human Cognitive Processing.

Ruhl, C. (1981). *On Monosemy*. New York: State University of New York Press.

佐藤芳明・田中茂範「名詞の多義の発生原理とその認知的身分」日本認知科学会第20回大会

田中茂範 (1990) 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』

田中茂範 (1996) 『前置詞における多義の多義性 複数図式論 vs. コア図式論』ふじさわ言語研究 3

田中茂範 (1997) 『基本語彙の多義性 名詞・動詞・形容詞』ふじさわ言語研究 5

田中茂範・深谷昌弘 (1998) 『<意味づけ論> の展開』紀伊国屋書店

田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) 『E ゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション